学習院大学新聞

発行所
学習院大学新聞社
〒171-8588東京都豊島区
目白1丁目5番1号
黎明会館316号室
電話 03（3986）0221内線2607
http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~press/
press@gakushuin.ac.jp
発行人　宮川　雅志
編集人　和田恵理子
年間500円

勝利の栄冠　5連覇達成

正式・一般種目で優勝

総合優勝通算48回目


拍手喝采される中、優勝杯を手に喜びを見せる本学代表

10月24日朝、第59回四大学運動競技大会が開幕。今年度は「煌（きらめき）」がスローガンとして掲げられた。これは、四大戦の参加者全員が煌めく瞬間を秘めていることからの決定だそうだ。今回は武蔵大学が主催となり、厳粛な雰囲気の中、開会式が執り行われた。実行委員長である太田耕介さんが開会宣言をし、出場者の健闘を祈る。これから迎える怒涛の3日間を前に、選手達は湧き上がる期待と緊張の面持ちだった。

多くの試合が行われたこの期間、本学はどのスポーツにおいても各選手が尽力し、高得点を獲得。数ある正式種目の中でも、剣道や卓球は昨年から大いに躍進し、他の三大学を抑え、1位を手にした。一般種目では振るわなかった競技もあったが、全体的にまずまずの結果であった。

最終日、激戦を戦い抜いた選手達が会場に続々と集まり、閉会式が催される。まず、皆が心待ちにする成績発表が行われた。正式種目において、1位本学、2位成蹊、3位武蔵、そして僅差で成城が4位となる。一般種目でも本学が首位に輝き、成城、武蔵、成蹊と続いた。残念ながら教職員種目では本学は優位に立つことが出来ず、1位に武蔵・成蹊が躍り出て、3位に本学、4位に成城が就く。最後に、最も注目を浴びる総合得点だ。次位とは20点以上の差をつけ、本学が1位を戦守。そして成蹊が2位を奪取する。3位に成城、4位に武蔵という結果になった。

賞状授与の際には、方々から歓声や拍手が舞い上がり、選手達は勝利の喜びを味わっていたようだ。次に、実行委員長挨拶で太田さんは、雨天により予期せず生じたトラブルを謝罪。また、無事大会に幕を下ろせたことに感謝の意を表した。感極まったのか、途中で言葉につまる場面もあり、熱く繰り広げられた戦いの締めくくりにふさわしい挨拶だった。

今年で59回目となった四大戦。今回も本学が堂々の総合優勝を果たし、これで5連覇の快挙となった。来年は、第60回大会と、記念すべき節目の年となる。今年度の結果に満足することなく、さらなる飛躍を遂げた選手達が、次回も存分に勇往邁進してくれることを願う。（田上ひかり）

【総合得点】
学習院大…１５５・５点
成蹊大…１３５点
成城大…１０９・５点
武蔵大…１０８点

「柔」の道を制す

柔道部

【26日　10号館5F道場】

現在最も注目を浴びている競技の一つである柔道。本学は昨年惜しくも準優勝であった。永尾樹主将（済3）は「今年は1年生から4年生まで揃い、戦力も充分なものになりました。チーム一丸となって優勝を目指します」と、その固い決意を述べた。

今試合はそれぞれ4分間、9名の団体戦で行われる。初戦にぶつかる成蹊大は、昨年度の優勝校だ。ここで勝利すれば本学は一気に波に乗れる。先鋒戦は引き分けであったが、次鋒の渡辺裕太選手（済3）が合わせ技一本で流れを作る。その後は引き分けが続いたが、大将の野村俊介選手（営1）が内股で一本勝ちとなり、2勝1敗で成蹊大を下した。

続く第2試合の相手の成城大は、3名での出場であった。本学は六将、中堅、四将の選手たちが試合に挑む。六将の永尾主将をはじめとして、全試合一本勝ちで決めるという見事な内容となった。

そして、お互い2勝同士で臨むこととなった武蔵大戦。この試合に勝ったチームが今年度の優勝校となる。七将までは1敗2分けと振るわなかったが、永尾主将が上四方固めで一本を取り、流れを引き戻す。その後の中堅戦、四将戦は引き分けとなり、三将戦を迎える。ここで矢部彰太選手（政1）が鮮やかな一本背負いを決めて勝利し、本学優位の展開に。しかし、続く副将戦を落としてしまい、互いに2勝2敗で大将戦となる。大将の重圧にも負けず、野村選手は果敢に攻め入り優勢勝ちを収め、本学は見事、四大戦の覇者となった。


攻めの機をうかがう永尾主将（右）

試合後、永尾主将は「最終戦を制した側が優勝という状況になり、ほどよい緊張感を持って戦うことが出来ました。今回は6年ぶりの優勝ですが、来年は連覇を目標として頑張っていきたいと思います」と、展望を語った。素晴らしい結果を残し、大きな一歩を踏み出した本学。今後のさらなる躍進から目が離せない。（宮下秀毅）

白星挙げる

卓球男子

【24日　10号館ホール】

あいにくの雨天とは裏腹に、卓球会場は白熱ぶりを見せた。本学は団体戦で堂々の3連覇を成し遂げたのだ。

本年度の団体戦は、成蹊大、成城大との三大戦になる。チームはダブルス1組、シングルス4組の構成だ。当日、石井貴之主将（化3）は「成蹊陣が強豪なので、気を抜かずに臨みます」と闘志を燃やした。初戦の対成城大戦では3－2の勝利で幸先の良いスタートを切り、2戦目の成蹊大戦が始まった。1試合目に登場するのは清水浩希選手（営1）だ。2ゲーム先取し主導権を握るも、相手も引き下がらない。持ち越された最終ゲームでは相手に付け入る隙を与えず、見事に一蹴する。

2試合目では石井主将が出場。相手は成蹊大のエースだ。立ち上がりから相手の積極的なスマッシュにより、第1ゲームを落としてしまう。一転して第2ゲーム、石井主将のショットで相手のミスを誘い同点に並ぶ。流れを引き寄せた第3・4ゲームでは巧妙なカットを駆使し勝利を掴み取った。相手校エースから獲得したこの1勝が自信となり、チームはさらに勢いに乗る。


成蹊大エースを下す石井主将

3試合目は石井、原田洸平選手（法3）のダブルス。序盤から本学はミスを連発し、相手に先制を許す。挽回すべく競り合うが、終盤では相手のスマッシュが次々に決まり、敗北を喫する。4試合目も相手に競り及ばず、ストレート負けとなってしまった。

ここで2勝2敗の互角となり、チームの勝敗が懸かった一戦を高橋秀幸選手（化4）が担う。会場は緊張感で張り詰めていく。高橋選手は1ゲーム目を強烈なスマッシュで締める。その後激しい攻防が続き、ゲームカウント2－2と後のない局面を迎えギャラリーの注目が集まる。最後はラリーミスを引き出し、激戦の末に優勝を果たした。

緊迫した中で栄光を勝ち取った卓球部。来たる甲南戦での活躍にも注目したい。（早川結）

四大戦とは

旧制高等学校時代に結びつきを持った学習院、成蹊、成城、武蔵の4大学による運動競技大会、それが四大戦だ。そのルーツは本学が1950年、スポーツを通じて大学間の交流を深めることなどを目的として発足させたことにさかのぼる。そして今回で59回目を迎えた、長い歴史を誇るイベントなのだ。なお、開催地は4つの大学が持ち回りで務めることになっている。

本大会は運動部の学生が参加する正式種目、学内予選を勝ち抜いた学生による一般種目、教職員種目という3部門で構成され、いずれも熱のこもった激戦が繰り広げられる。運動部に所属していない学生や教職員も参加できることが、通常の大学間スポーツ大会にはない特徴だ。

みやっちFC

秋は、やはりスポーツ！というわけで、最近サッカーをやっている。中学の時から始め、今では鋭いドリブルに正確なパス、シュートを身につけることができた。といっても、ウイ○レでの話なのですが。（宮）

演武会

【24日　10号館5F道場】

冷たい秋雨が降りしきる四大戦初日、合気道部と空手道部による演武会が開催された。彼らが登場すると、会場は引き締まった雰囲気に包み込まれた。

演武の一番手は合気道部である。1年生は基本技、2年生は自由形、そして3年生が徒手空拳を披露した。学年が上がるにつれて技に磨きがかかっていく。無駄のない滑らかな動きや、様々な技を繰り出すその姿には、日々の稽古の成果がうかがえた。そんな中でも特筆すべきは、坪沼佑侑主将（英3）によるかかり稽古である。同時に攻撃を仕掛けてくる2人の部員を素早い動きで捌き、投げ、組み伏せていく。彼女の型から型への流れの美しさに、観客は魅了された。それらの動きには荒々しさではなく、踊りのような優雅ささえ感じられた。

次に登場したのは空手道部。黙想による精神統一を行い、全員での型披露を開始した。道場の畳全体に広がり、力強い突きや、回し蹴りなどの技が繰り広げられる。その後、各学年に分かれての演武である。1年生の平安五段、2年生の抜塞大・観空大、3年生の明鏡が演じられた。これらは、敵との攻防を仮想した一連の動作を見せる技である。観客は、学年ごとに息を合わせて演じる部員の姿に見惚れていた。松尾真理子主将（史3）に今年のテーマについて伺うと「今回は各学年の好きな型を演じました。また、例年と違って独演を行わなかったのは、仲間との調和を重視したためです」と答えてくれた。つまり、武道の精神である大調和を体現する構成となっていたようだ。

ちなみに、例年なら少林寺拳法の演武もある。しかし今年は雨で中止だった。次の機会に彼らの雄姿が見られることを期待したい。

武芸で最も尊重されるのは弛まぬ稽古である。武道の精神のもと、日々の部活に取り組む、彼らのさらなる活躍が楽しみとなった演武会であった。（菊岡真衣）

共に掴んだ栄光

駅伝男女


両手を広げ、1位に輝く大國選手

【26日　駅伝コース】

四大戦において今年も大いに盛り上がりを見せた駅伝。1・5㎞のコースを女子は1人2周、男子は4周する。1チーム4人構成で、各大学からA・Bチーム出場し、合計タイムで順位を競う形式である。

始めに、女子がスタート。本学A、1区の安原彩香選手（済4）は出だし快調な走りを見せ、先頭に躍り出る。本学Bも奮闘し、追い上げて3位になるも、2区では膠着状態が続く。

成蹊Bが独走状態となるが、本学Aは一定の距離を保つ走りで、3区の濱野智子選手(心4)につなぐ。成蹊Bを追い抜かし、見事本学Aが1位となった。

一方、本学Bは3区の横野理絵子選手（心3）が疾走し、武蔵Aを抜き去り3位に立つ。そこからは本学Aの独壇場となり、2位以下を大きく引き離す。ゴール直前、満面の笑みを浮かべテープを1位で切った。本学Bも流れに乗った勢いで成蹊Bを抜き、2位でゴールし、見事本学は1、2位を独占。「テニス部現役時代に苦しい思いをして、走ってきた成果を生かすことが出来ました」と濱野選手は嬉しそうに語った。

女子優勝の興奮が冷めぬまま、男子がスタート。本学Aチーム1区の吉田朋広選手（済3）は初めから武蔵Bと競り合いながら強気の走りを見せ、2位で通過する。しかし、続く2区では武蔵を振り切るも後半に相手の猛追を受け、5位でたすきをリレー。

一方、本学Bチームは当初6位と出遅れたが、平山聖士選手（済3）は本学Aをも抜き去り、4位に飛躍する。だがその後、3区ではA、B共に先頭から大きく離されてしまった。

最終の4区では及部一仁選手（済3）が今年も最優秀選手賞に輝く走りで追い上げを見せるものの、チームは惜しくも5位でフィニッシュ。本学Bも他大学に届かず4位でゴールし、総合成績は2位となった。

「今年もこれだけの応援の中で走れたことは学生生活における一つの財産となりました。今後は次世代の走者に思いを繋げていきたいです」と将来に期待を寄せていた及部選手。

残念ながら男女優勝には至らなかった。しかし毎年駅伝に興奮させられるのは彼らが想いを秘め、力を尽くした走りを見せてくれるからだ。来年は、どのような活躍を見せてくれるのだろうか。（谷口竜基）

実力差を覆せず

バドミントン男子


息を合わせて攻め込む本学

【24、25日　大学体育館】

バドミントンは例年通りの団体戦形式の試合だ。本学はここ数年の間、成蹊大に敗れ準優勝に留まっている。岩崎暁主将（済3・あきら）は試合前「成蹊大は強敵です。しかし、胸を借りるつもりで粘るプレーをして、優勝を目指したいです」と決意を語った。

初日は武蔵大、成城大との戦い。本学はチームの一体感を保ち、総合力で武蔵大を3－2で下す。成城大戦は個々のメンバーが実力を発揮して5－0で圧倒した。連勝し、成蹊大戦に向け弾みがつく結果となる。

大会2日目は大一番の成蹊大戦。第1試合に岩崎主将が出場した。強力なスマッシュやヘアピンを駆使し、互角の戦いが続くが競り負ける。第2ゲームは開始早々から優位に試合を進め、見事なラケットワークで、21－14でこのゲームを取る。ところが、第3ゲームは中盤で失点が続く。逆に一方的な展開となり、1－2で惜しくも敗れた。

第2試合に出場した石井達也選手（史3）は、シャトルを懸命に拾い自分のペースに持ち込もうとする。だが、相手の勢いは止められず、0－2のストレート負けで苦杯を喫した。

最後の試合は岩崎選手・石井選手のペアが登場した。第1ゲームは序盤からミスが続き、16－21で落としてしまう。第2ゲームは点数が相互に入る均衡した展開になる。岩崎選手と石井選手のコンビネーションが冴え、26－24の接戦を制した。だが、最後は一方的な試合展開となり、合計1－2で残念ながら敗北となってしまう。最終結果は1－4で、本学は2勝1敗の総合準優勝になった。

岩崎主将は試合後、「普段通りの力が発揮できませんでした。精神的な面でもより一層充実が必要です」と結果を振り返った。来年こそは、この四大戦の舞台で本来の実力を発揮し、ぜひ優勝を狙ってほしい。（板垣亮平）

一般種目

不運にも雨に見舞われた四大戦は、悪天候のせいで思うように予定が進まず、朝霞グラウンドの方では、試合の日程が大幅に変更。教職員の硬式庭球や女子のフットサル等、一部の競技では中止になったものも見られたが、そんな中でも選手達はチームメイトや応援団、学校関係者の声援に応えようと精一杯のプレーを展開した。一般種目では、競技ごとの優勝は少なかったものの、二位の成蹊大学を2点差で退け、3年振りに首位の座に輝いた。

奇跡の逆転で頂点に

ソフトボール男子


サヨナラとなるホームインを前にガッツポーズを高々と掲げる根本選手

【25日 アメフト・ラクロス場、ホッケー場】

初日の雨によって25日に全試合を行うこととなった男子ソフトボール。急な予定変更で残念ながら本学Bは棄権してしまい、本学Aも初戦敗退に終わった。唯一残ったジョイスル（本学C）は、学習院勢の期待と応援を一身に背負って優勝を目指す。夕闇が迫る悪状況の中、チームは成蹊大との準決勝に臨んだ。

本学の後攻で試合が始まった。内外野が一丸となった守備は、確実なボール運びで走者を本塁へ返さない。攻撃では、初めは成蹊投手の速球に戸惑いながらも、バントを試みるなど戦略的に対抗する。二回裏まで0―0で拮抗した展開が続いたが、三回表に成蹊打線が奮い立つ。着実に塁を進める成蹊選手と、堅実に一つずつアウトを取る本学守備陣が競り合うが、相手に先制点を奪われてしまう。それでもチームに落胆の色は見えず、冷静に3アウトを取って1失点に抑えきった。

三回裏では本学の反撃ムードに圧されてか、相手投手の投球が乱れていく。四死球による無死一、二塁のチャンスに場内は沸き立った。そして安永匡輝選手（心3）の三塁打が右翼へ大きく放たれる。逆転サヨナラ勝ちで、本学は決勝へと駒を進めたのだ。

細谷修平主将（法3）は「せっかくここまで来たので、皆で気持ち良く戦いたい」と朗らかに語り、グラウンドへ向かっていった。

決勝戦の対戦チームは武蔵A。そしてフィールドに審判の「プレイボール！」の声が響き渡る。

しかし本学は一回表、立て続けに安打を被り、いきなり0―2とビハインドを背負う。その裏の攻撃でも三者凡退に追い込まれ、さらに二回表で0―3と点差を広げられてしまう。なんとか点を入れたい一心で挑んだ二回裏。本学は対戦投手の四球による好機を逃さず、塁を埋めていく。流れを完全に掴んだチームは、内野ゴロの間に1人返し、続けての安打で2人目も生還。2―3でチェンジとなり、最終回に望みを託す。

三回表は本学に失策が出て緊張が走る場面もあったが、その後は正確な守備でボールをこぼさない。最後は余裕あるグラブ捌きで3つ目のアウトを奪い、運命の三回裏に臨んだ。

1人目の打者が、準決勝を彷彿とさせるような死球で一塁へ進む。続く打者は4番の根本淳史選手（法3）。否が応にも高まる期待に見事応え、白球が夜空へ飛んだ。文句なしの逆転サヨナラ本塁打で、ジョイスルが優勝を手に入れたのである。

試合後のインタビューで細谷主将は、「この結果は応援団や、出場していないメンバーの声援のおかげです。本当にありがたいですね」と感謝の意を示した。劇的な勝利を本学にもたらしたジョイスルは、新たな目標を胸にこれからも累進していく。

（筒井久実子）

7連覇を紡ぐ熱い絆

バドミントン男女


会心の一撃を連発し、試合のペースを掴む両選手

【26日 高・中体育館】

一般種目のバドミントンでは、今年も強豪チーム、めじけんが男女共に決勝戦に勝ち進んだ。男子は善戦するも準優勝に終わったが、女子決勝では細谷友里選手（独2）・小林遥選手（済2）が、見事優勝を手にした。これで、女子は通算7連覇を達成したことになる。

男子は本学Aペアの大槻剛選手（物3）・渡邊慧一選手（法3）が試合を勝ち抜き、決勝戦で成蹊Aペアと対峙した。両者は試合前に「とにかく勝つしかないです」と気合いを見せてくれ、その言葉通り、試合は熱戦となった。

しかし強張りが生じたのか、最終ゲームでは本学側にミスが目立ちだし、アウトを連発してしまう。その積み重なりの結果、惜しくも1―2で勝利を逃してしまった。試合後、両選手は「自分たちは攻めを活かすべきペアなのに、守りに入ってしまいました。勝てない試合ではなかったです」と反省点を見通し、優勝を目前にしての悔しさで表情を曇らせていた。

一方、女子の決勝も成蹊大と対戦することになる。細谷選手は「サークル内の他の強豪ペアを制してここにいるので、それだけに参戦できて嬉しいです」とバドミントンへの想いを秘めた瞳で語ってくれた。

試合が始まると、2人は息の合った動きで着実に点を重ねていく。序盤から主導権を握る本学。相手を動かす配球の果てに小林選手がスマッシュを決めて18―14となり、そこから失点を許さずにゲームを制した。

しかし続く第2ゲームでは一転、出だしは相手側がリードする展開になってしまう。豪快なスマッシュを放とうとするも失敗が多く、連続して点を取られることになり、選手にやや焦りが見え始めた。だがゲーム開始から4点を先取された直後、細谷選手が鋭いプッシュによって長いラリーに終止符を打つ。この一撃で勘を取り戻した2人は、試合の流れを引き戻した。

その後は対戦ペアも良い動きをするが、本学はすぐさま互いの連携で阻止し、得点を奪い返す。そして冷静な姿勢が功を奏し、2―0のストレート勝ちで優勝するという素晴らしい結果となった。

試合が終わると、両選手は満面の笑みで優勝の喜びを分かち合う。「いつもの試合練習のおかげです。危ない場面は強気で乗りきれました」と力強く応えてくれた。「優勝の期待に答えられて嬉しく思います。来年も再来年も優勝し、常勝ペアになりたいです」と輝かしい笑顔で今後の目標も語ってくれた。

四大戦という大舞台で7連覇を達成しためじけん。高いチームワークを武器に、今後も白星を挙げ続けてほしい。

（大原梨句）

絶えぬ闘志

バレーボール男子

【26日 高・中体育館】

一般種目男子バレーボール3位決定戦は、クエーサー（本学A）と武蔵Aで行われた。同じくクエーサーである本学B・Cは惜しくも途中敗退に終わる。この結果を受けて、試合前に主将の谷村大介選手（法3）は「優勝を逃したことが悔しいです。だが今はやれることを全てやり、勝つしかないです」と強く話した。

両チームへの大きな声援がこだまする中、試合が始まる。本学は試合の滑り出しでなかなか攻撃を決め切ることが出来ず、相手が6得点する間、1得点に留まってしまう。だがタイムアウトを取り悪い流れを断ち切ると、その後徐々にリズムを掴み始めた。北村剛大選手（政2）のサービスエースからの連取と、水上諒選手（日2）のブロックを引き金に本学の怒涛の攻めが見られた。9―19から19―20の1点差に一気に追いつき、チームの底力を存分に発揮する。勢いを保ち、長いラリーを制してセットポイントを奪い、このセットを26―24で先取した。

後半は第1セットに比べ相手側のミスが目立つ様になる。一方で、本学は確実な攻撃を続け、安定感のあるプレーを展開した。連続得点も多く、コート中から縦横無尽にコンビネーションの光るスパイクを放ち点を重ねた。24―15の後、相手側に一時流れを持っていかれそうになる。しかしスピードのある連携プレーを決め、25―17で第2セットを制する。ストレート勝ちで3位を決定づけたのだ。

3連覇を逃しはしたが、選手達は十分にある実力を戦いの中で見せてくれた。


力強くスパイクを決める北村選手

試合終了後、「いつも通りの動きが出来るならば、負ける気がしていなかったです」と谷村主将は頼もしく語った。普段の自分達のプレーを信じて試合に臨むことが出来るのも、彼らが持つ強さであろう。また「始めは体が動いていなかったです。けれどその後に自分達で作り出した良い流れを切らなかったのが勝因です。全ての選手が良い動きをしてくれました」とも振り返る。

この試合で引退の3年生は、後輩達に来年の優勝というさらなる躍進への願いを託した。今後は、想いを受け継いだ新しいチームが活躍してくれることを期待したい。

（原田富美子）

士気崩さず優勝

卓球混合


真剣な表情で球を追う吉田選手・野原選手ペア

【26日 10号館ホール】

一般種目卓球は女子、男子が振るわぬ結果で低迷する中、混合ダブルスが唯一の決勝進出を果たした。出場したのは吉田和矩選手（営3）・野原ゆき選手（営4）ペア。成城大相手に行われた決勝戦は、手に汗握る試合運びであった。

出だしから、吉田選手の力強いスマッシュが冴える。打ち返す隙を与えない速球に会場は沸きあがり、試合のペースを一気に本学へと引き寄せた。さらに野原選手は相手の動きを読んだレシーブで虚を衝き、ミスを誘う。互いにサーブ前にはサインを出し、一球ごとに明確な戦術を持って打ち込んだ。勢いづいた本学は順調に点を重ね、21―10で第1セットを制した。

このままの流れでいけるかと思われた第2セット目だが、成城大の粘りに苦戦を強いられる。挽回しようとする相手の気迫に押されたのか、レシーブミスが目立ち始めた。互いに声をかけ励まし合うが、うまく修正が効かず4―10と差をつけられてしまう。この悪い流れに対し、本学はサーブで立ち向かった。相手の弱点を見抜き、横回転を効かせたサーブを巧みに繰り出し9―11と僅差まで追い詰める。それからは両校とも一歩も引かぬ競り合いが続いたが、惜しくも18―21でこのセットを落としてしまった。

第3セットを迎え、会場は静寂に包まれた。どちらが勝つか予想のつかない試合展開に、会場の緊張は高まる。しかし、本学はその空気に飲まれることはなかった。「第2セットを終えた後、二人で呼吸を整えました。そうすることで、気持ちを切り替えて集中できたのだと思います」と吉田選手はこの時を振り返る。

合間の一呼吸が功を奏し、1球目から得意のスマッシュが決まる。成城大も負けじと攻めるが、焦りが見えミスを続出。本学は冷静な判断で攻め、一層相手を突き放す。強い精神力がものを言い、最終セットは21―9と大差をつけ、優勝で幕を閉じた。

過去2年間、他選手とペアを組んで出場していた吉田選手は「三度目の正直で優勝することができました。卒業される野原先輩に有終の美を飾れて嬉しいです」と喜びを噛みしめた。

一方、野原選手は「初参加でしたが、とても楽しめました。四大戦を肌で感じられたことを幸せに思います」と笑顔で語った。

運動サークルの活躍が多い一般種目で、個人参加が目立つ卓球。そのためか、成績は年によって変動し、安定感が見られない。今大会で見事に優勝に輝いた両選手を称え、来年にこの追い風を継ぐ選手が登場することを望む。

（深田杏）

教職員種目

【26日 高・中グラウンド、高・中体育館】

四大戦には正式種目、一般種目があるが、その他にもうひとつ、種目があるということはご存じだろうか。それは、皆さんも日頃お世話になっている教員や職員の方々による競技、教職員種目というものだ。

この種目で行われる競技は、硬式庭球、バレーボール、ソフトボールの3つである。25日の硬式庭球は天候の関係により残念ながら中止となり、バレーボールは惜しくも4位に終わってしまった。

だが昼に行われたソフトボールは、それらのことを忘れさせてくれるほどの素晴らしい成績を残している。教職員チームの代表者である蓁々会の瀧澤拓也さんは試合前に「本学は現在ソフトボールで4連覇中なので、今回も勝って5連覇を目指したいです」と、心強い意気込みを述べてくれた。その言葉通り初戦の成蹊大戦は、瀧澤さんの豪快な本塁打が出たうえ打線が爆発し、8―2の大差で勝利する。

次いで行われた決勝。相手は武蔵大である。この試合は初戦とうって変わって、一回、二回と両者無得点の膠着状態が続く。試合が動いたのは三回表だ。1番打者である教務課の筒井啓之さんが、自慢の俊足を活かし一塁へ出る。次打者、大学図書館の瀬戸山雄介さんも続けて安打を放ち、無死一、二塁と相手を引き離す絶好のチャンスを迎えた。3番の選手が打ち取られ、打席に立つのは4番、瀧澤さん。三遊間を破る適時打を放ち、貴重な2点を得る。しかし、武蔵大もここは意地を見せ、追加点を許さず三回裏へ。ここで相手も1点を返し、1点差まで迫りくる。この本学がやや劣勢の中、中堅へ鋭く飛んだ打球を、生涯学習センターの圓谷勝利さんがダイビングキャッチ。この目の覚めるようなプレーが、相手チームへと傾きかけていた流れを完全に本学へと引き戻した。試合はこのまま2―1で逃げ切り、本学は見事5連覇を達成したのである。瀧澤さんは試合を「今年は、特に若手の職員が頑張ってくれました」と振り返る。

試合後のベンチには、戦い抜いた選手達の爽やかな笑顔があった。応援団や学生達の声援も、選手の熱気を後押しし、その舞台を一層鮮やかに彩っていた。

（周防和明）

今年度四大戦での本学の各競技得点

正式種目	
アイスホッケー	0
アメリカンフットボール	2
駅伝（男）	3
駅伝（女）	4
弓道（男）	3
弓道（女）	4
剣道（男）	4
剣道（女）	4
硬式庭球（男）	3
硬式庭球（女）	4
硬式野球	3
ゴルフ	2.5
サッカー	1
自動車	4
柔道	4
水泳	4
水球	1.5
スキー（男）	4
スキー（女）	2
漕艇	2.5
卓球（男）	4
馬術	1.5
バスケットボール（男）	2
バスケットボール（女）	4
バドミントン（男）	3
バドミントン（女）	3
バレーボール（男）	4
バレーボール（女）	4
ハンドボール	2
フィギュアスケート	0
ホッケー（男）	0
ホッケー（女）	2.5
洋弓（男）	4
洋弓（女）	3
ヨット	2.5
ラクロス（男）	3
ラクロス（女）	2.5
ラグビー	3
陸上競技	3
合計	110.5

一般種目	
硬式庭球D（男）	0
硬式庭球D（女）	4
硬式庭球D（混）	3
サッカー	2
ソフトボール（男）	4
ソフトボール（女）	3
卓球S（男）	1
卓球D（男）	1
卓球S（女）	1
卓球D（女）	1
卓球D（混）	4
軟式庭球（男）	2
軟式庭球（女）	0
軟式庭球（混）	2
軟式野球	3
バスケットボール（男）	2
バスケットボール（女）	3
バドミントン（男）	3
バドミントン（女）	4
バレーボール（男）	2
バレーボール（女）	0
合計	45

教職員種目	
硬式庭球	
ソフトボール	4
バレーボール	1
合計	5

社告

4面コラム
FLASH BACK

感動のあの一戦を紙面に残してみませんか？

学習院大学新聞社
黎明会館316号室

E-mail:gakushuinpress@hotmail.com